

平成 28 年度 資源評価調査報告書（資源動向調査）

都道府県名	宮城県	担当機関名	宮城県水産技術総合センター
種名	マアナゴ	対象水域	宮城県沿岸水域

1. 調査の概要

宮城県総合水産行政情報システムにより、県内主要10産地魚市場での水揚統計及び宮城県漁業協同組合表浜支所の共販統計から全県の漁獲量を把握した。

2. 漁業の概要

宮城県における2001～2010年のマアナゴの漁獲量は322.4～553.3tの範囲で変動していた。漁獲物のおよそ8割以上は仙台湾から水揚げされている。漁業種類別では、筒漁業（ハモ胴）による水揚げが多い。筒漁業の盛漁期は6～12月である。その他の漁業では、小底や沖底等で漁獲されている。2011年は、東日本大震災の影響により213.1tまで落ち込み前年比66.1%となった。震災後の2012～2015年は398.3～568.5tの漁獲量となった。2016年は381.5tと前年と比べやや漁獲量の減少がみられ前年比85.1%となった。漁業種別の割合では震災年の2011年を除いて大きな変化はみられなかった(表1、図1)。

3. 生物学的特性

レプトケファルスが黒潮波及水に乗り仙台湾に5～7月にかけて来遊したのち、水深10m前後の浅海域に着底し、概ね夏までに変態を完了して稚アナゴとなる。稚アナゴの多くは内湾や沿岸域で成長し、大部分は翌年の9月頃に全長35cm前後になって仙台湾の漁場に移動し、漁獲対象である全長40～60cmの群とともに漁獲されるが、一部は地付きになってそのまま成長する。仙台湾の漁場では水温10℃を超えると漁獲が増加し、水温の降下する1月以降は漁獲が減少する。水温の変化に伴って深層域等との間を移動するものと推定される。仙台湾では6～7月は50m以浅、8～9月は40～80m、10月以降は80～130mで多く漁獲される。ほとんどが未成熟の雌であり、雄は稀である。全長60cm以上になると、生殖腺の発達がみられるようになり、この段階で産卵回遊を開始するのではないかと推定されている。

4. 資源状態

漁獲状況から2011年を除けば中位と判断されるが、2016年は前年と比べやや漁獲量の減少がみられていることから、今後の動向を注視する必要がある。

5. 資源回復に関するコメント

レプトケファルスの来遊量や稚魚の量と2年後の漁獲量の関係に有意な関係がみられることから、漁獲変動を少なくするためには新規加入群の管理を行うことが重要であると考えられる。宮城県では2007年度にマアナゴ資源回復計画を策定し、これに基づき漁業者が実践計画を策定して、レプトケファルスの漁獲禁止と全長30cm未満魚の漁獲禁止を実施している。

表1 宮城県におけるマアナゴ漁獲量の推移

	気仙沼	志津川	女川	牡鹿	石巻	花刈浜	塩釜	閑上	亘理	表浜	総計
2001	23.3	13.8	9.0	0.4	90.7	26.5	49.4	0.3	9.8	195.2	418.5
2002	26.7	16.9	6.4	0.5	70.4	20.7	45.9	0.4	8.2	167.3	363.4
2003	25.8	14.5	4.7	0.3	63.5	20.3	58.7	0.6	7.1	176.4	372.0
2004	25.9	17.7	7.1	0.2	117.3	24.9	36.3	0.9	11.9	232.1	474.4
2005	19.5	16.2	4.8	1.2	66.2	7.1	26.3	0.4	11.3	179.6	332.5
2006	17.3	14.5	5.8	1.1	130.5	10.0	37.0	0.5	8.1	226.3	451.2
2007	19.0	19.0	6.3	1.1	150.0	19.3	32.5	0.5	6.6	299.0	553.3
2008	20.3	19.7	5.4	0.7	106.9	14.5	23.1	0.5	5.0	223.1	419.3
2009	35.5	20.2	8.7	0.5	90.3	4.1	23.2	0.5	5.4	225.2	413.5
2010	34.8	20.1	9.5	0.5	98.6	4.9	17.1	0.3	2.1	134.5	322.4
2011	10.0	7.8	2.4	0.0	88.3	12.0	14.7	0.0	0.9	76.9	213.1
2012	38.5	36.2	29.5	0.1	105.8	9.2	15.1	0.0	0.0	163.8	398.3
2013	67.4	50.0	37.5	0.8	186.9	8.2	18.2	0.0	1.3	198.2	568.5
2014	64.2	55.2	35.9	0.7	164.3	6.8	19.2	0.0	1.8	152.1	500.2
2015	55.6	25.1	16.5	0.6	184.3	4.1	15.3	0.0	1.1	145.4	448.0
2016	51.2	21.6	13.2	0.7	170.4	3.0	13.8	0.0	1.6	106.0	381.5

※データ: 宮城県総合水産行政情報システム, 市場帳票

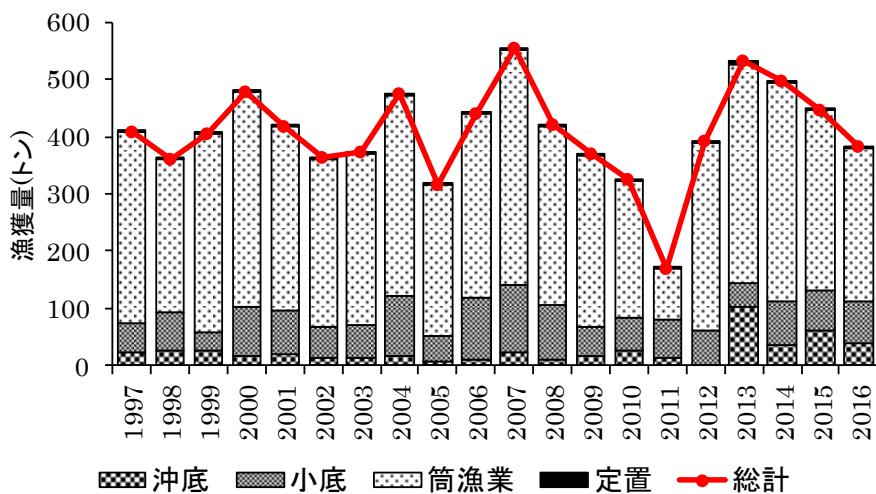


図1 宮城県におけるマアナゴ漁業種別漁獲量の推移

平成28年度 資源評価調査報告書（資源動向調査）

都道府県名	福島県	担当機関名	福島県水産試験場
種名	マアナゴ	対象水域	常磐海域

1. 調査の概要

漁獲量集計：年別・漁業種類別漁獲量を集計し漁獲動向の基礎資料とした。  
 （東京電力福島第一原発事故により沿岸漁業の操業自粛および平成24年6月22日より当該魚種の出荷が制限されていたが、平成28年6月9日に解除され、同年8月から試験操業対象種として漁獲が再開された。）

2. 漁業の概要

(1) 主要漁業：漁業種類別漁獲割合は、マアナゴは沖底65%、小底12%、かご等21%で、ノレソレは船びきが100%（平成13～22年の10年間の平均値）。  
 (2) 漁獲動向：マアナゴ漁獲量は、平成7～9年は800t前後だったが、平成10年以降は400t前後で推移している。平成28年における漁獲量は42.7tであった。  
 ノレソレ漁獲量は年変動が大きく、平成19年は過去最高（12t）であったが、平成22年は2.6tであった（図1）。

3. 生物学的特性

(1) 分布海域：水深300m以浅に分布。  
 (2) 成長：満1歳で25～30cm、最大で100cm以上となる。  
 (3) 産卵期等：産卵期は冬（年齢の起算日は12月1日）。  
 (4) 成熟年齢：不明である。

4. 資源状態

漁獲動向からみた資源水準は中位と判断された。約6年にわたる操業自粛が続いており、資源動向を判断するのは難しい。

5. 資源回復に関するコメント

「福島県マアナゴ資源回復計画」（平成19年2月）に基づき、マアナゴの全長規制（30cm）を実施している。また、ノレソレの操業について相双地区では全面禁漁、いわき地区では漁期規制（2～5月）、数量規制（20kg/隻・日）、休漁日設定に取り組んでいる。今後効果の評価をもとに、より適切な管理手法を検討する必要がある。

操業自粛による資源の増加が想定されるため、自粛による影響を試算し、操

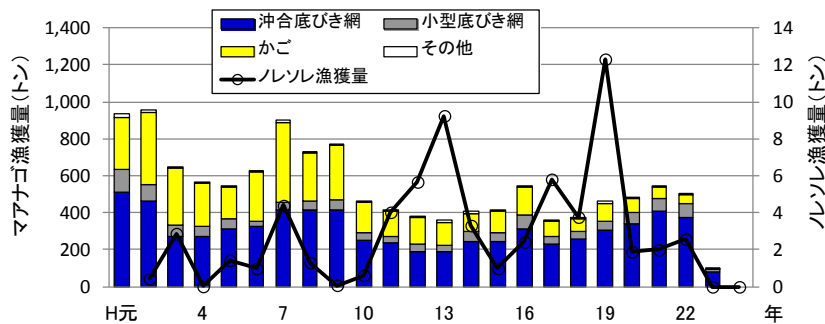


図1 マアナゴの漁法別漁獲量推移